

九時頃攻撃を再開すると、重慶第五八軍は既に退いた後だった。(夜射撃をし、その間に退却したか)

九月十八日払暁、第十一軍は一斉に攻撃を開始した。

第四十師団は十七日夕、次のとおり攻撃準備を完整展開した。

歩兵第二三六連隊(亀川部隊)小塘付近

歩兵第二三四連隊(重松部隊)团山坡

十八日未明、隠密に沙港河を渡った兩翼隊は、天明とともに歩砲の戦力を結集し(迫撃第一大隊含む)一挙に揚林街東西の既設陣地を突破した。その後、亀川部隊は順調に南進を続けて夕刻には胡小保付近に進出した。

胡小保で一夜を明かした亀川部隊は、十九日未明右追撃隊となって関王橋を経て南進し、团山(関王橋南八キロ)付近の隘路口で敵第六十師団を撃破したのち、東進して同夜横山橋付近に進出した。そして師団は平江に向かったのである。

この十八日に、体験者河越氏の戦友奈良氏は戦没

し、夜茶毘に付し遺骨を飯盒に収め、十九日未明出發したのであろう。

三亭溝の戦い

従軍の思い出

愛知県 川嶋 正 巳

昭和十二年七月七日、北京城外蘆溝橋において演習中の我が部隊に対し、支那軍は三回に及び小銃二、三十発を撃ち込んだ事件があり、日支両現地軍が小銃り合いを起こした。その抗争がたちまち拡大して、我が国は内地部隊の派遣を決し、支那(中国)では中央直系軍が上海附近に集中を開始した。

八月十三日、上海の我が特別陸戦隊(約五〇〇〇人)が突如小銃射撃を受けたが応戦し、これは鎮静した。この日夕刻、支那軍は砲撃を開始し、ついに交戦状態に入った。当時の私は、豊橋の歩兵第十八連隊にあり第一機関銃中隊所屬の軍曹であった。兵営では常

に「軍の主とするところは戦闘。戦闘には迅速な勝利を」と教え、それを目指して演習を重ねていた。

八月十四日、第三師団（他に第十一師団など）に動員が下令された。動員第一日を八月十五日とされ、この日から一週間の間に動員計画に従い、平時状態から戦時状態に一新された。連隊は召集された二〇〇〇人を加えて概ね四〇〇〇人の戦時編成に、軍馬六〇〇頭を充足、兵器・被服をことごとく皆を新品に交換したのである。また同時に野戦部隊とは別に、補充隊が編成された。

八月二十日、第三師団は上海派遣軍に編入されたとの発表があり、軍司令官は中国通の松井石根大將だとのことであった。

八月二十六日、豊橋出発。列車そのものにな変わったところはない。ただ運行の時刻が、通常の列車運行の間を縫って組まれており、多い日には一日四十九本もの軍用列車が走ったのを知っている。馬匹輸送のため、通常ワム（十五トン積有蓋貨車、八頭積み）を牽引していた。座席定員通りに乗り、各車両に車長（そ

の車両の上級先任者）が命ぜられ、停車駅の見送りの者に対しては、この車長だけが立って答礼し、一同は腰掛けたまま姿勢を正して謝意を表すことになっていた。

窓からこぼれ落ちんばかりに乗り出し、旗や手を振って名残惜しそうに行くのは弱い軍隊の証拠とされていた。輸送軍紀も正しく私たちは一路西進した。

どんな深夜もいとわず、駅には日の丸の旗を持った国防婦人会の方たちが出て、湯茶の接待や補給やら見送りなど熱心にもてなしてくれていた。岡山あたりから朝になったが、家の傍ら、道路などにも竹んで軍用列車を挿んでくれている人が見られて、兵隊たちは感激に胸を痛くしたのであった。

八月二十八日、輸送船「はいかる丸」は僚船五隻と共に宇品港出帆、九月一日、黄濁の揚子江河口に集結、駆逐艦十隻が河岸に近づいて、艦砲射撃を繰り返すのを見た。

伝達されたところによると、第五旅団（歩六・歩六

八部隊）〔ちなみに私共歩一八と静岡の歩三四は第二十九旅団〕は応急動員され、軍艦に分乗し名古屋港から急行して、早くも八月二十三日、艦砲の支援射撃を得て呉湊に敵前上陸し、優勢な敵の頑強な抵抗を排除して概ね六〇〇メートルの内陸深く確保しているが損害甚大、苦戦している。八月二十九日、歩兵第六部隊の倉永連隊長も戦死されたとのことであり、戦勢は容易ならんことを知らされた。

九月二日、戦火に壊されている呉湊棧橋に上陸し、集結地に急いだ。しかしまだ動き出さないうちに、流れ弾のため二人、また部隊が動き出した途端に敵の砲弾の炸裂によって二人戦死。また軍馬二頭が地雷か迫撃砲かで爆死した。

市街は目茶苦茶に焼け壊れて、敵兵の死体が散乱、腐敗して膨れ、蛆の巣となっているのを目の当たりにし、これが戦地だと思った。

日本がこんな風になったら大変だ。美しい郷土は戦火に晒してはならん。誰しもがそう思ったに違いない。

私達は背囊を日陰に残して背負い袋（各人携行していた大きなカーキ色の風呂敷に、携帯口糧、米麦二日分、乾麵包一日分と少しの日用品を包み、肩に背負っていた）に代え、四塘クリークから分かれた枝クリークを前にして展開し、渡河準備を整えて攻撃命令を待った。

私たち機関銃中隊は第四小隊を第四中隊に配属し、中隊の主力は右・第一中隊、左・第三中隊の中間にあつて敵情及び前地の地形を偵察した。

午後二時頃、突然大爆発音がしたと思つたら第三中隊の長谷小隊は突撃してクリークの彼岸へ進出してしまった。正面の藪陰に敵兵一人が立った。それを狙撃したら、腹に挿していた手榴弾に命中して炸裂、その敵兵が吹き飛んだ。長谷小隊長は好機とばかり突撃して彼岸を占領した、ということだった。第三中隊の主力も私たち機関銃中隊も遅れじと渡河して二〇〇メートルほど前進した。第一中隊も大隊本部も前進した。その後で攻撃前進の命令がきた。私共の第一大隊、ひいては連隊の戦闘開始は実にこの独断突撃によるもの

であり、その頃はまた敵の射撃も、そんなに激しくなかった。

すぐ前は三亭溝部落である。機関銃は九二式重機関銃、口径七・七ミリ、重量六〇キロ、一機関銃に分隊長以下十一人が付き、四人または二人で搬送する。射手、弾込め、見張り、伝令の四人と弾薬箱四箱四人、銃馬・弾薬馬各一頭とその馭兵二人である。ただし馬は戦闘間は弾薬小隊（後方にある）と同行し、この馭兵が戦闘の間に糧食・弾薬などを銃側へ運び届けた。弾丸は一秒間に一〇発、一連三〇発を三秒で撃つ。

馴れた兵が上手に装填すれば一分間六〇〇発を撃つことが出来る。故障が少なく、取り扱い易く、攻撃兵器としては最高のものと思う。主として敵の機関銃等重火器を求めて射撃するのであるが、常に最前線に進出、散兵線を引きずる気概でやれと要求されている。

もう少し重機関銃を説明すると、三脚で据わり、地上高二十八センチ、さらに十八センチ伸び上げることが出来る。倍率六倍、高さ二十二センチの眼鏡が装着

でき、遮蔽して急襲射撃するのに都合良かったが、これは敵の射撃で割と早く破壊されてしまった。

三亭溝の直前から敵の射撃は猛烈になり、八キロメートルにわたる正面が銃声、機関銃声でいっぱいになり、まるで別世界のようで、砲撃音も混じり出した。中国軍の戦史によると、上海戦線の当初二十万の軍隊とあるので、半分後方として前方に十万、昼夜三交替で戦闘するとみても約三万人が射撃する。そして、時間は一〇発ずつ撃つとしても三〇万発、一分間に五〇〇〇発、一秒に一〇〇発近い射撃となり、凄い弾数である。

チェッコと呼ぶ機関銃はタラララッと甲高くせっかちに鳴る。それにタタタタタと独特な緩慢さで長く続く水冷式重機、これらの重機が何百挺あるのでさうか。さらには近距離射撃に適する軽・重迫撃砲の炸裂が混じる。土砂が跳ねる、草木がちぎれ飛ぶ、棉畑の白い棉が跳んで転がる。どちらから来るのか、さっぱり分からなかった。

物凄い射弾の中、土饅頭に伏せて、眼鏡で敵情を偵

察していた塩野小隊長が狙撃された。パシッと来た弾で胸部をやられて転落、駆け寄って起こしたが、鮮血が二筋、軍服にほとぼしり流れ、低く唸るだけで言葉も出せず、包帯所へ運ぶ途中で亡くなられた。

「クソッ！」と大切な人をやられて皆怒った。私が小隊を指揮して「さあ、仇討ちだ」と敵を捜し、チェッコの射撃している砂埃を発見した。二台の重銃でよく狙い、集中火を浴びせてやった。そして目標付近は痛快な土煙で覆われた。「よーし！」と言った途端、パシッパシッパシッと来た。慌てて伏せたがその凄いくこと、体中へ土砂を浴びた。幸いそれだけで被害は無かったが、小隊長の戦死もあった私達の緒戦の会戦であった。

「あ！ 奴はやっつけた。手応えがあった。撃つて来たのは他の奴だ。そいつを捜せ。いいか、先に見つければきつとやっつけられる」と私達は夢中になってよき敵を捜した。

第四中隊配属の林第四小隊長も右腕貫通銃創を受けたことを聞いた。

指揮班の松尾上等兵が胸部貫通銃創。中隊長に抱かれて「やられてすみません……だんだん見えなくなりました……もう何も見えません」と虫の息。最後に声をふりしぼって「天皇陛下万歳！」と唱えて息絶えた。感激されてか中隊長は「よし、金鵒勲章だ」と大声で叫ばれた。

それにしても夥しい射撃だ。射抜かれた楊柳の葉がハラハラと散る。三亭溝部落の前縁に敵線があり、一連の散兵壕を造っている。全員が土の中（蛸ッポ）から射撃してくる。めくら撃ちが多いのか、一般に弾は高いようだ。だが機関銃は照準もよく集中してくる。生意気な敵だ。機関銃は機関銃と渡り合う。撃てば撃たれる中で得意の急襲射撃を繰り返す。敵は一向に閉口垂れぬ。戦えば勝つといういつもの調子とは勝手が違う。

敵の掩体は交通壕で結ばれ、横にも後方にも通じている。このため部落内部と後縁など全面が敵である。火力を集中しても退却する敵は一兵もいない。敵兵を殺傷しない限り敵陣は占領出来ないのである。

機関銃は全力で第一線の両中隊の戦闘に協力、連隊砲（山砲）、野砲も火力を集中してくる。三亭溝及びその背後の部落は黒煙と土煙でもうもうとなる。突撃支援射撃の最後の一発は榴霰弾として空中で破裂させ、それを合図に突撃し、薄暮一挙に部落に進出した。

二亭溝に進出した私たちは、機関銃の掩体を構築し、夜間でも命中するよう射撃の設備を整えた。日は敵の陣地に沈み、夜に入って射撃の音はますます激しくなった。日本軍の夜襲を恐れるからであろうか。

夜中十一時頃、左前方第四中隊との間隙あたりの方から、チェッコの腰だめ射撃らしく弾が振り回すように来る。それも五、六挺はある物凄い夜襲だ。支那そばのチャルメラに似たラッパと共にワイワイ声をあげながら近づく。銃手はいつでも飛び出せるように銃剣を片手に、敵を天空に透かせて見える位置に伏せ、射手は射撃号令を今やおそしと待つ。充分引き寄せ「撃て」の号令で火ぶたを切る。夜間射撃の準備がしてあるので、手さぐりでも撃てる。たちまち阿鼻叫喚。ア

イヤ、アイヤの泣き声もまじる。手榴弾は無数に爆ぜるが、幸いちょっと届かない。その代わり乱射乱撃で、あたり一面にバチバチと弾が当たり、上砂や石片が跳ねる。そのうちに敵の後方の崩れ家屋が燃え出して明るくなり、照準し易くなった。

一時間足らずで夜襲は完全に阻止できた。この戦闘では、割合に弾が上ずっていて、我に損害が無く助かった。翌朝、黒山のように死んでいるのを見たが、中央直系の正規兵と雑軍の混合部隊であった。

この上海戦は十一月七日まで続き、激烈な戦闘の明け暮れであった。一日平均一〇〇メートルずつ進んだことになる。抗戦意識に燃え、あるいは督戦隊に押し返されて絶体絶命の立場で陣地を死守した中国軍と、伝統と訓練で作り上げられた攻撃精神を叩きつけた日本軍とが、四つに組んでやり合った激戦であった。

守るには都合よく、攻めるにはまことに困難なクリク地帯での壮烈な戦闘であった。戦死された先輩、僚友の武勇を称え、謹んで英霊をお祀りいたします。